２０２３年１１月１２日　説教『アブラハムが生まれる前から』　高橋克樹牧師

聖書　創世記１２章１～９節、ヨハネ福音書８章５１～５９節

１２月１０日の特別伝道礼拝はペットロスについて話すことになりました。以前から日本キリスト教団の内部では、日本の労働人口が減少に転じている中で、教会は生き残っていくことができるのかという論議がなされてきました。厚生労働省の予測では２０３０年には現在より約８％減少すると予測されています。それもいわゆる６４歳までの労働人口の数値です。６５歳以上の労働人口も若干増えていくのですが、教会を経済的に支える核となる年齢層の労働人口は減少し続けることがわかっています。

ですから、従来と同じような伝道活動をしていてはまずいのではないかという論議があったのです。ご存じの通り、少子高齢化が加速している日本です。そして、その結果として、日本の児童の数よりも、ペットの数の方が多くなるという現象があらわれました。しかも、代表的なペットである犬や猫は室内飼いをしても１５，６年で召されていきます。家庭で飼育されているペットを見送る飼い主はそのたびに悲しみに暮れることになるのです。ペットは家族の一員になっているのです。

しかし、いまだにたかだかペットが亡くなったぐらいで、なんで悲しむの？という無理解な声もありますが、愛する家族が召されることと同じようにペットロスによって悲しむのは人間なのです。人間にとってペットも愛着対象ですから、そういう愛着対象を喪うことは大きな悲嘆感情を生じさせるのです。そういう意味で、ペットの死に向き合うことについて、話してみることを今回、テーマにしてみたのです。

キリスト教会はそれでなくても敷居が高いのですが、ペットを飼っている人は、先ほども申し上げたように、近い将来自分が勝っているペットが亡くなったときのことは考えているので、そういう方たちに教会に足を運んでもらう機会になればということで、ペットロスのことを取り上げてみたのです。

さて、創世記１２章は、アブラハムが神の導きに信頼して、メソポタミアのハランの地を捨ててカナンへと旅立つときに、神の祝福の約束が語られる個所です。遊牧民でアブラハムにとって、一族が互いに協力して家畜を養っているハランの地は安全な土地です。一族の団結力によって外敵から自分たちを守ってくれる一族がいるのですから、ハランにいて家畜を飼育する生活はとても快適であって、神の導きとはいえども、いまだ見知らぬカナンの地に赴くことは無謀な冒険のようなものだったはずです。１２章１節で神は『あなたは生まれ故郷　父の家を離れて　わたしが示す地に行きなさい』と言います。「離れる」というのは「捨てる」ことです。捨てることで新たな使命が与えられるんです。その使命を果たそうとする信仰に対して、神が祝福の約束を与えます。２～３節『わたしはあなたを大いなる国民にし　あなたを祝福し、あなたの名を高める　祝福の源となるように。あなたを祝福する人をわたしは祝福し　あなたを呪う者をわたしは呪う。地上の氏族はすべて　あなたによって祝福に入

る』と言って、アブラハムが地上の民すべてを神の祝福に入らせる礎とすると約束しているんです。この言葉には、アブラハム個人に対する祝福を与えるためにカナンの地へと導くという限定された約束ではないという点が目を引きます。つまり、アブラハムは自分が神の祝福を受けるために、神の導きに自らを委ねたわけではないということです。

アブラハムが信仰の父と言われるのは、彼が神の導きに己を委ねたからではなく、地上の民がすべてアブラハムによって祝福に入るという神の約束を信じたからだというのです。アブラハムをすべての民の祝福の源となるように養い育てるという神の言葉がアブラハムをして、神の導きに委ねる決断をさせたということが見落とされてはならない点だと思います。

そして本日のヨハネ福音書の個所ですが、イエスが悪霊に取りつかれているとユダヤ人に責められています。それに対してイエスは、アブラハムが生まれる前から「わたしはある」と答えたあります。ユダヤ人にとって、アブラハムは信仰の父であるという大前提があったので、イエスがアブラハムを見たような言い方をしたことが気に食わないのでした。それに対してイエスは、アブラハムが生まれる前から「わたしはある」という存在だというのです。つまり、神がアブラハムをすべての民を祝福へと導く基となるように導かれたのですが、そのアブラハムが生まれる前からイエスは神と共に存在していたということです。ということは、この地上でのイエスの働きは、アブラハムをすべての民を祝福へと導く基としようとする神の意志と同じだということです。イエスはすべての民を神の祝福を受けるべき存在として招く意志を持っている方だと、ヨハネ福音書は言っているのです。

ヨハネ福音書はイエスがどのような存在であるのかについて明らかにしようとすることを目的に書かれた福音書です。その視点で言うならば、イエスはアブラハムのように、すべての民を神の祝福へと導く器であるということです。そして、創世記１２章３節にあるように、アブラハムは神の祝福を受けた者として、私たち洗礼を受けた者と同じです。つまり、私たちキリスト者を神は祝福するのです。そして、地上の民がすべてアブラハムによって祝福に入るという神の約束を信じて約束の地に赴いたように、私たちも地上の民が自分の信仰によって祝福に入るように導いていく器だということを自覚して歩んでいきたいと思うのです。

アブラハムを用いて神がすべての民をご自分の祝福の内へと招いたことを覚えるとき、私たちもまた、自分の信仰が多くの人を神の祝福へと導く道しるべとなることを目指して信仰の歩みを成していきたいと思います。イエスの意志も神の御旨と同じくすべての民を神の祝福の内へと招くことにあります。イエスを信じる信仰を抱いている私たちの生きる目的は、すべての民を自分と同じく神の祝福の内に招くことにあります。私たちもアブラハムと同じく、すべての民を神の祝福へと導くために神の国を目指して歩んでいく流浪の民であることを自覚して、今週も信仰の歩みをなしていく一人ひとりでありたいと願うものです。